性格特性とストレスコーピングの相違に関する研究

○神原将¹・岩淵千明²

(1)川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科臨床心理学専攻・2川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科)

キーワード：性格特性 Big Five ストレスコーピング

Study on influence that a personality trait gives to stress coping

Tadashi KANBARA¹, Chiaki IWABUCHI²

(1)KAWASAKI University of Medical Welfare Graduate School of Health and Welfare Master's Program in Clinical Psychology・

²KAWASAKI University of Medical Welfare Clinical Psychology, Faculty of Health and Welfare)

Key words：personality characteristic, Big Five, coping

目 的

性格特性は個人の行動の仕方に表れる固有の感情や意向の傾向として、幅広く研究されており長い研究の歴史がある。性格特性が異なることにより人々には個性があり行動が変わったりすることもある。1980年代以降、基本的性格特性が5次元で表現できるとする5因子モデルの研究もおこなわれており、主要5因子性格特性が提唱されている。

コーピングとは、ストレスを適切に処理して統制するためにおこなわれる認知的で行動的な行為であり、ストレスにより生起するストレス反応を低減させる要因の一つであるとされている。

森本・木下・嶋田(2011)は、ストレスをどのように認知するのかによってコーピングの効果に影響があるとしている。このことから、日常のストレス場面で生じたストレスを大きな問題として認知するのか些細なこととして認知するのか、また、ストレスに立ち向かうとするのか逃げ出すとするのかに関しては性格特性によって異なってくると推察される。

以上のことから本研究では、性格特性とコーピング選択の関係について検討することを目的とする。

仮説1 誠実性の高い人は低い人より、問題焦点型が多い。

仮説2 外向性が高い人は低い人より、情動焦点型が多い。

仮説3 情緒不安定性が高い人は低い人より、回避・逃避型が多い。

方 法

調査対象者 K大学に在学する学生289名で、このうち記入漏れのあるもの、性別および年齢が不明なもの、回答が不適切であったものを除外した男性95名(33.2%)と女性191名(66.8%)の計286名の回答を有効とした(有効回答率98.57%)。対象者の平均年齢は19.92歳(SD=2.88)で年齢幅は18歳から62歳であった。

調査の実施 本研究は2011年7月から8月の間に質問紙を配布して回収した。

質問紙の構成 (1)フェイスシート：学年、年齢、性別。(2)エピソード法を用いた自由記述：2、3ヵ月の間に起きたネガティブな出来事を想起し記述してもらった。(3)Big Five尺度(和田,1996)：性格特性の外向性12項目、情緒不安定性12項目、開放性12項目、誠実性11項目、調和性13項目の5下位尺度を測定する計60項目から構成される。「非常に当てはまる」を7点とし「全く当てはまらない」を1点とする7件法での回答を求めた。(4)コーピング尺度(尾関,1993)：積極的なコーピングである問題焦点型5項目と情動焦点型3項目、消極的なコーピングである回避・逃避型6項目の3下位尺度の計14項目から構成されている。「全くしない」を0点とし「いつもする」を3点とする4件法での回答を求めた。

結 果

各性格特性(誠実性と外向性および情緒不安定性)の平均値を基準としてを高群と低群とに分けた。

誠実性と性別を独立変数とし、問題焦点型コーピングを従属変数とする2要因の分散分析をおこなった。誠実性高群と誠実性低群との間に主効果が認められ、問題焦点型得点は誠実性高群の方が誠実性低群より高いという結果であった($F(1,284)=10.51, p<.01$)。

		問題焦点型		Σ (N=286)
		男性 (N=95)	女性 (N=191)	
誠実性	高群 (N=150)	13.63(2.55)	13.77(2.83)	13.73(2.73)
	低群 (N=136)	12.57(2.75)	12.70(2.92)	12.65(2.86)
	Σ (N=286)	13.12(2.69)	13.27(2.92)	13.22(2.84)

外向性と性別を独立変数とし、情動焦点型コーピングを従属変数とする2要因の分散分析をおこなった。外向性高群と外向性低群との間に主効果が認められ、情動焦点型得点は外向性高群の方が外向性低群より高いという結果であった($F(1,284)=9.82, p<.05$)。

		情動焦点型		
		男性 (N=95)	女性 (N=191)	Σ (N=286)
外向性	高群 (N=138)	8.69(2.20)	8.60(1.95)	8.62(2.01)
	低群 (N=146)	7.90(1.80)	7.74(2.06)	7.80(1.96)
	Σ (N=286)	8.20(1.99)	8.20(2.04)	8.20(2.02)

情緒不安定性と性別を独立変数とし、情動焦点型コーピングを従属変数とする2要因の分散分析をおこなった。情緒不安定性高群と情緒不安定性低群との間に主効果が認められ、回避・逃避型得点は情緒不安定性低群の方が情緒不安定性高群より高いという結果であった($F(1,284)=10.13, p<.01$)。

		回避・逃避型		
		男性 (N=95)	女性 (N=191)	Σ (N=286)
情緒不安定性	高群 (N=153)	15.65(3.60)	14.93(3.36)	15.19(3.45)
	低群 (N=133)	16.70(3.05)	16.39(3.54)	16.48(3.39)
	Σ (N=286)	16.09(3.40)	15.64(3.51)	15.79(3.48)

考 察

本研究では、性格特性によってコーピング選択が異なることを明らかにすることを目的とした。仮説1と仮説2は仮説を支持する結果となった。しかし、仮説3については、有意差は認められたが仮説とは逆の結果となった。これは、情緒が不安定であるからこそストレスに固執してしまい、逃げ出すという選択肢が選択しにくくなるのではないかと考えることができる。

引用文献

森本浩志・木下奈緒子・嶋田洋徳(2011).コーピングの選択理由尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 ストレス科学研究,26,33-39.